



# Newsletter

No. 17 March 2015

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

## 政治問題と山火事

2度目のチリ赴任以来半年が過ぎようとしています。この間にチリでは大きな政治問題が発生しています。一つはPENTAという銀行が関連した政治献金問題、もう一つはBachelet大統領の息子夫妻による資金洗浄疑惑です。どこの国でも似たようなものだと思っておりましたが、今後の展開次第では大統領の責任問題にも発展するかもしれません。チリでは日本のように簡単に国のトップが代わるような事態は起こりえないようですが、大統領支持率は大きく減少しました。現在南米ではチリ、アルゼンチン、ブラジルの主要3か国で女性大統領が就任していますが、これで3人とも大きな問題を抱えることとなりました。

夏の間気温が30度を超えることが多かったのですが、チリ各地で山火事が多く発生しました。最近では国会が所在し、立法首都であるValparaíso市近郊で大規模な山火事があり、昨年に続いての出火に消防士の奮闘ぶりや住民避難の様子が報道されました。私の実感では21年前より湿気が多くなったと感じていましたが、たばこのポイ捨てや、ごみ焼却などの影響もあるようです。

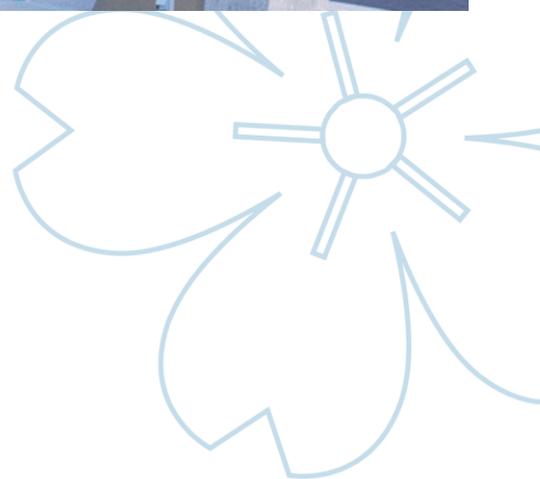
Valparaísoは太平洋の宝石とも称された美しい街で、2003年に街並みが世界遺産に指定されています。近郊に保養地、リゾート地であるViña del Marもあり、夏の休暇期間中はチリ国内はじめ、南米各国から多数の旅行者が訪れます。若者も多く集まり、夜間は危険な地域が増えたようですので、旅行の際には十分な情報収集が必要です。

このニュースレターが発行される頃には河内講師、岡田助教が任期を終了され帰国されます。河内講師は3年間、岡田助教は2年間LACRC業務に従事されましたが、帰国後のご活躍を心から祈念しています。

椿 昌裕



バルパライソの街並み



**LACRC** TMDU IN CHILE  
Latin American Collaborative Research Center  
Santiago de Chile



## Contents

ご挨拶 .....	1
PRENEC最新情報 .....	2
エクアドルプロジェクト .....	4
LACRC活動報告 .....	6
離任の挨拶 .....	7

# PRENEC最新情報

ラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin America Collaborative Research Center、以下LACRC) のメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは現在、2012年よりマガジャネス病院(ブンタアレナス市)とエドワルド・ペレイラ病院(バルパライソ市)、2013年よりサン・ボルハ・アリアラン病院(サンティアゴ市)の3拠点が稼働しており、今年度からはサン・パブロ・デ・コキンボ病院(コキンボ市)とバセ・デ・オソルノ病院(オソルノ市)の参加決定、またアントファガスタ病院(アントファガスタ市)の参加が見込まれています。

## PRENECコーディネーター専任病理医勤務開始

本学は、JICA支援下の日本における研修会(早期食道・胃・大腸癌の病理組織診断)を通じて、中南米地域の医師の人材養成に協力してまいりました。本号では1997年この研修に参加して3月よりPRENECのコーディネーター専任病理医として就任したペニャローサ医師にご寄稿いただきました。

### パウリーナ・ペニャローサ医師

#### サンティアゴ・オリエンテ・ドクトール・ルイス・ティスネ病院病理部 副部長

私が1997年にTMDUを訪れてから長い時間が過ぎましたがそのでの経験は今でも鮮明に思い出されます。約3カ月間の日本滞在中に「早期食道・胃・大腸癌の組織診断」のコースに参加しましたが、もともと私の病理医としての研修先は日智消化器病研究所という既に日本と強い繋がりを持ったサン・ボルハ病院であった為日本の概念を取り入れることができ、サン・ボルハ病院での研修が終わるとともにJICAを通じた貴学における研修会への参加が具体化しました。講義と実習で二部構成されていたこの研修には中南米の9名の病理医が参加し、最初の研修はTMDUにおいて中村恭一教授(当時)のコーディネーターのもと江石義信先生、河野辰幸先生、清成秀康先生、工藤進英先生、小池盛雄先生、下田忠和先生、渡辺英伸先生他偉大な先生方より講義を賜ることとなりました。その後グループに分かれ異なる施設に送られましたが、私は他の医師と共に幸運にも都立駒込病院の小池盛雄先生のもとで実習するチャンスに恵まれました。実習においては夜遅くまで取り組むこともありましたがそんな時は小池先生が常に気にかけて帰り道を送ってくださいました。先生方は大変親切で教育者としても素晴らしく特に中村先生、小池先生は常にコミュニケーションを図って配慮いただきこの数カ月は生涯忘れ難いものです。また滞在中には現在もTMDUとつながりの深い外国人研修者であるパラ医師とフェノッキ医師ともここで知り合うこととなりました。チリに帰国してからは公立のソテロ・デル・リオ病院とサン・ボルハ病院の2施設において日本で学んだ経験や知識を大いに活かしながら学会参加や論文発表に励んでおります。現在はサンティアゴ・オリエンテ・ドクトール・ルイス・ティスネ病院にて婦人科分野、腫瘍学分野を中心に取り組んでおりますが、消化器分野も変わらず堅持しております。

数カ月前フランシスコ・ロペス医師より今回のPRENECプロジェクトの参加依頼を受けました。我が国の健康増進にとって大変重要で意義のあるプロジェクトのメンバーの一部として活躍できることは名誉なことであり、TMDUとの繋がりを持つこのプロジェクトに貢献したい所存であります。

最後に、世界中の医師に素晴らしい機会を与えてくださったTMDUの先生方に深甚なる敬意と感謝を申し上げます。(翻訳: 早川)



#### 略歴:

1993年チリ大学医学部を卒業。1997年以降病理医として研修を積む。その後サン・ボルハ病院等での勤務を経て、2008年サンティアゴ・オリエンテ・ドクトール・ルイス・ティスネ病院の病理部副部長に就任。



1997年小池盛雄先生と記念撮影

## 第三回エクアドル日本・大腸病変講習会開催

本年2月24日から2日間にわたって、エクアドル・キトにおいて内視鏡技術および病理診断技術の指導を目的とした「第三回エクアドル日本・大腸病変講習会(Tercer curso ecuatoriano-japonés de lesiones colorrectales)」が開催され、LACRCより椿教授(内視鏡分野)、河内講師(病理分野)、小田柿助教(内視鏡分野)3名が講師として参加しました。

内視鏡分野においては、椿教授による「日本の一地方病院における大腸癌検診結果」、「早期大腸癌の内視鏡診断及び治療」の講演と、小田柿助教からは「大腸内視鏡」、「大腸ESDの実際」のそれぞれ2講演ずつ行われ、両日にわたり大腸内視鏡検査のデモンストレーションを実施しました。また病理診断分野においては河内講師より「チリ・大腸癌検診プロジェクトにおける病理学的解析結果」、「胃生検の病理診断」の2講演と顕微鏡によるディスカッションを担当し、最終日、椿教授、河内講師、小田柿助教が中心となって行われた大腸病変の症例検討会では参加者からも活発なディスカッションが行われ大盛況のうちに閉会となりました。

今回講習会参加者は、大腸癌検診プロジェクトの拠点である国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院の内視鏡医・病理医・技師のほか、本プロジェクトへの参加を検討している他の公立・準公立病院の内視鏡医・病理医をあわせ約80名程でした。



板垣参事官による開会式の挨拶



内視鏡トレーニングの様子



現地スタッフとの記念撮影



講演中の椿教授



講習会ポスター

# エクアドル保健省・在エクアドル日本大使館表敬訪問

LACRCスタッフは2月26日、在エクアドル日本大使館板垣参事官とモンタルボ医師と共にエクアドル保健省を訪れ、アクリオ副保健大臣、ロドリゲス次官との面会をもちました。アクリオ副大臣からはエクアドル大腸癌検診に対するこれまでの本学の貢献に多大なる感謝の意を表明され引き続きの支援を強く希望されました。また、現在エクアドル保健省では大腸癌のみならず、胃癌や子宮頸癌といった他の癌についても検診を整備したいと考えており本学の方式に関心を示されました。

夕刻からは在エクアドル日本大使館へと場所を移し、エクアドル側からはモンタルボ医師に加えヴァカ医師、メヒア医師らと共に会談を行いました。板垣参事官からは今後も継続的な支援が続くよう在エクアドル大使館からもできる限りの協力をしていくとの表明がありました。



エクアドル保健省前にて



エクアドル独立記念碑前で記念撮影

## 《エクアドル保健省ホームページに今回の本学の取り組みが掲載》

### ■ Ecuador aliado con Japón, para vencer el Cáncer y las enfermedades digestivas

Publicado el Jueves, 05 Marzo 2015 19:40 | Visitas: 99



Como parte de un Memorando de Entendimiento firmado entre el Ministerio de Salud Pública (MSP) y la Universidad Médica y Dental de Tokio (TMDU), por sus siglas en inglés, en el Hospital Pablo Arturo Suárez se desarrolló el Tercer Curso Ecuatoriano Japonés de Lesiones Digestivas, dirigido a cerca de 80 profesionales entre endoscopistas, patólogos, oncólogos y cirujanos, el 24 y 25 de febrero.

El taller estuvo a cargo de profesores japoneses y tiene como objetivo realizar una capacitación teórica y práctica al personal médico en detección, diagnóstico y tratamiento de las lesiones digestivas tumorales en fases tempranas, cuando todavía son curables.

Mediante este taller el MSP fortalece las capacidades del talento humano de los establecimientos de salud del Ecuador, en el marco de las acciones de prevención primaria y secundaria de cáncer colorrectal, y pone a disposición de la población ecuatoriana esta conducta sanitaria preventiva para detectar oportunamente una lesión colorrectal maligna.

En el mes de agosto del 2012 se firmó un Memorando de Entendimiento entre el Ministerio de Salud Pública (MSP) y la Universidad Médica y Dental de Tokio (TMDU, por sus siglas en inglés), con la finalidad de implementar el tamizaje de cáncer colorrectal (CCR) en el Ecuador.

Este proyecto piloto se ha desarrollado en el hospital "Pablo Arturo Suárez", y es coordinado por la Subsecretaría Nacional de Vigilancia de la Salud Pública, a través de la Dirección Nacional de Estrategias de Prevención y Control.

El tamizaje consiste en hacer una prueba de sangre oculta en las heces fecales; los pacientes que presentan resultados positivos deben realizarse una colonoscopia para la detección de las posibles lesiones. Se realiza una biopsia y el estudio correspondiente.

Actualmente en Ecuador la mayor parte de las lesiones colorrectales se detectan en estadios avanzados. Sin embargo, siguiendo los protocolos del tamizaje recomendados por los profesionales del Japón, se logra la detección temprana y se pueden realizar las intervenciones necesarias para salvar la vida o generar una mayor expectativa de vida del paciente.

Para Ecuador, es importante la cooperación de países como el Japón en las investigaciones sobre el cáncer, ya que ese país tiene la esperanza de vida más alta del mundo. A pesar de las altas tasas de cáncer que registra dicho país, ha sabido canalizar sus recursos y capacidades para implementar estrategias preventivas de las neoplasias digestivas, disminuyendo la incidencia y mortalidad de algunos tumores malignos.

## 癌と消化器病変の克服に向けてエクアドルと日本の提携

“エクアドル国保健省・東京医科歯科大学間で2012年8月に締結された覚書に基づき本年も2月24・25日にパブロ・アルトゥロ・スアレス病院にて第三回エクアドル日本・大腸病変講習会が開催されました。

中略

現在エクアドルでは結腸直腸病変の多くが末期のステージで発見されています。しかしながら日本の専門家が推奨する検診システムを導入し始めたことで早期発見・治療が可能となり、検診を受けた患者の予後の改善に寄与することができました。

エクアドルにとって日本のような世界一の長寿国であり癌研究に取り組んでいる国の協力は大変重要であります。日本は癌発生率の高い国として知られているにもかかわらず、消化器癌による死亡者数抑制の政策に重きを置くことで悪性腫瘍の発生率や死亡率の減少に繋がっています。”

(翻訳: 早川)

# 活動報告

## サンチャゴ日本人学校中学部による職場訪問

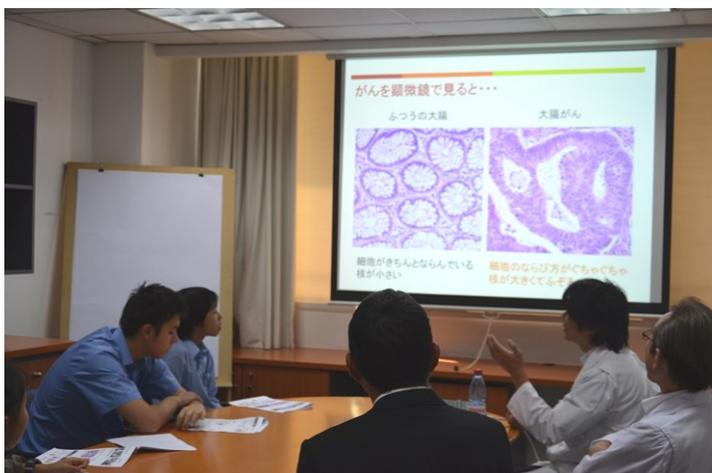
サンチャゴ日本人学校からの要請により2年に1度の職場訪問が本年2月11日に行われました。当日は、中学部の生徒5名が、椿教授、岡田助教、小田柿助教の勤務するサン・ボルハ病院日智消化器病研究所を訪問し内視鏡室にて内視鏡の見学を行いました。またCLCにて河内講師によるチリにおける本学の取り組みや、医療職のキャリア、チリの癌の特色や癌細胞の病理標本の紹介の後、CLC内の救急外来やヘリポートを見学しました。学生の中には将来医師になることを志願している生徒もあり今回の職場訪問を通して貴重な体験ができたコメントもあり有意義なものとなりました。LACRCスタッフは今後も積極的に見学体験学習に貢献して参ります。



椿教授による内視鏡の紹介(サン・ボルハ病院)



CLC救命救急士による救急車内の説明



河内講師による病理診断の紹介(CLIC)



CLCヘリポートにて記念撮影

# Staff

2012年3月より約3年という赴任医師の中でも最長の期間において病理診断研究やPRENEC、JDP、エクアドル、ブラジル、パラグアイの各プロジェクトへの取り組みに深く携わった河内講師と2013年から2年間CLCや保健省直轄サン・ボルハ病院にて内視鏡の臨床指導に取り組んできた岡田助教が任期満了の為3月に離任されることになりました。

## 離任挨拶

### 河内 洋 LACRC 人体病理学分野

2015年3月17日、まだ晩夏の強い陽射しが照りつける夕刻、お集まりくださったLACRCスタッフやチリで親交のあった在留邦人の皆様に見送られながら、住み慣れたアパートを後にし家族と共にサンティアゴ空港に向かいました。思い返せば初めてサンティアゴ空港に降り立ったのも3年前の同日であり、「3年と1日」のチリ駐在生活を送ったこととなります。現在は3年ぶりの日本の桜を感慨深く眺めながら、数奇な運命ともいえる我が家のチリ生活を振り返っているところです。

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)においては、日本の質の高い大腸内視鏡挿入・診断技術の導入がチリ側から最も期待されていた点であり、本学からLACRCに派遣された歴代の外科医・内視鏡医達は、チリ側の受け入れ体制が決して十分とは言えない状況の中、存分に持てる技術を発揮し、チリ側の期待に応えてきました。プロジェクトは道半ばではありますが、その点においては「チリにおける大腸癌死亡率低下」という最終目標へ着実に向かっているといえるでしょう。一方、病理分野に関しては、日本の蓄積された知見に興味を示すチリ人病理医が少なく、如何にして彼らに我々の経験を理解してもらうか、というのが大きなテーマとなっていました。前任であった伊藤助教の尽力で状況は随分改善されましたが、その後の展開という意味においては私自身の力不足のために、十分な結果を出すことができず、その点については反省しております。しかし一方では、国民性や言語の異なる中、自分なりに最善を尽くしたという思いもあります。

「長い目で見れば人生には無駄がない」と言います。研究留学でも無く、海外で3年間過ごすことは、私たちのような職種では大変に珍しいことですが、南米のチリにて勤務するという希有な経験を積むことができました。私の赴任に伴い、思いがけず見知らぬ異国で生活することになった運命を受け入れてくれた妻や子ども達にも感謝しています。彼らにとっても、かけがえのない貴重な経験になったと確信しています。

チリでの3年間、チリ人や在留邦人との出会い、南米大陸の大自然や異文化の経験など、良き思い出は沢山ありますが、一方で異国の地で思い通りに行かないことに対する苦悩や、外国人としての身の置き所の無い思い、人々との軋轢などを経験することも少なくなく、チリ人や彼の国に対して否定的な印象を持ったこともあります。しかしこ

のような負の部分は、日本で暮らしていても経験することであって、それは私が3年間という長い間地に足をつけてチリに生活していた証であり、数週間程度の滞在では決して味わうことのできないものだったのだと思われるのです。そのように考えるとき、否定的な気分はもはや無く、むしろチリで出会った友人達の温かな心や、良い思い出ばかりが思い出されます。またエクアドルプロジェクトへの協力においても多くの信頼できる人達と出会い、共に仕事することができた幸運にも恵まれました。

帰国後は、本来の専門分野である病理診断の現場に戻ります。今後、中南米への医療協力を直接携わることはおそらくありませんが、そのような運命が再び訪れる日までは、日本の現場から静かに見守りたいと思います。LACRCの益々の発展、チリやエクアドルのプロジェクトの成功を心より祈念するとともに、私の赴任中、同僚として苦楽を共にし、公私ともに支えて下さった津野里枝子さん、ハイメ・ウレホラさん、早川美貴さん、小林真季先生、岡田卓也先生、田中浩司先生、小田柿智之先生、椿昌裕先生に深謝しつつ、欄筆といたします。



LACRCオフィス前にて左よりハイメ、小田柿助教、椿教授、河内講師、早川

## 離任挨拶

### 岡田卓也 LACRC食道・一般外科学分野

2013年4月からLACRCに赴任し、ちょうど2年の任期で本年3月に離任することになりました。任期中はチリで大腸癌検診を始めるにあたり、現地医師や政府に対して主に内視鏡関連の提言や指導を行って参りました。業務の中で最も印象に残っているのは、チリに到着して間もなく、2013年6月から首都サンティアゴで大腸癌検診が開始され、多数の参加者が押し寄せて目まぐるしく忙しかったことをよく覚えています。現地では検診について未経験なスタッフばかりで、私もまだチリでの生活に慣れておらず、時には夜遅くまで皆で悪戦苦闘して乗り切ったことも、今では良い思い出です。その甲斐あって、徐々に検診の良好な成績が出始めており、私の活動もチリの健康増進に少しは貢献できたのではと考えています。

振り返ってみると、正直なところ仕事も日常生活もうまくいくことばかりではありませんでした。環境が大きく変わり、言葉や文化の壁に悩まされ辛い日々もありましたが、検査の度に患者さんから「わざわざ日本から私達のために来てくれてありがとう。これからも頑張ってください」と声を掛けてもらい、勇気づけられた気がしました。いつも周囲のチリ人、現地日本人の方々にも助けられながら、何とか大きな問題なく任期を終えることができ、お力添えを頂いた皆様には感謝の念に堪えません。

海外での医療活動は私にとっては初めてのことで、とても良い経験になりました。世界に目を向けることで、日本の医療をこれまでと違った視点で捉えることができるようになったと感じています。その他にも、チリを公式訪問された安倍昭恵総理夫人と懇談する機会を頂いたり、チリ政府の要人と面会したりと、日本では得難い体験もすることができました。本学よりこのような機会を頂いたことにとっても感謝しております。

LACRC内視鏡部門は更に2人の新しい先生方が赴任され、今後活動は発展を続けるものと信じております。私自身もまたチリでの経験を活かし、今度は日本医療の発展のため更に邁進して参りたいと思います。



サン・ボルハ病院における内視鏡トレーニング



サン・ボルハ病院スタッフによる送別会の様子

### 編集後記

本号でお知らせさせて頂きましたようにLACRCオフィスでは2名の医師の離任、現地病理医の勤務開始と慌ただしい毎日です。出会いと別れのこの時期、新任地での益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。また僭越ながら2月よりLACRCオフィスにて事務補佐を担当させて頂いております。今後LACRCオフィスの近況をご報告してまいりますので何卒宜しくお願い致します。

(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点  
Latin American Collaborative Research Center  
Newsletter No. 17, March 2015

[発行日] 2015年3月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center  
Tokyo Medical & Dental University  
Clínica Las Condes  
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile  
Tel: (56-2) 2610 3780  
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp